

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設名	ウィズブック保育園天王洲
所在地	品川区東品川2-5-5ハーバーワンビル1階

1 活動のテーマ

「ことば・異文化」

＜テーマの設定理由＞

（園の環境や強み）立地上、外国人の方にお散歩で声をかけてもらったり、外国籍の友達がいる、日本ではない国やその国の言葉・文化に興味がある子どもたちが多く環境です。

（子どもの興味関心があると判断した理由）同じものでも、日本語と英語で名前が違うことなどにも興味がある様子があったため、外国語に触れられる機会を設定しました。さらに、単なる語学学習に留まらない、日頃親しんでいる好きなもの（あそび・のりもの・ダンスなど）を通して、異文化を知るきっかけをつくりたいと考えました。オンラインで外国人講師とやりとりをする中、興味も広がってきていました。例えば、世界で色々なおもちゃがある中で、同じくらいの子ども達がどのように遊んでいるのか興味を持ちました。言葉も違う、住むところも違う子ども達の遊びと自分たちの普段のあそびを比べるなど、多様性を知るきっかけとなると考えました。

2 活動スケジュール

【5月】

日々の英語プログラムの活動を通して、世界の人々へ興味を持ち始めたことから、遊びを通して自分たちとの「共通点」を探してみました。

【6月～9月】

「広い世界の中にもある遊び」として各クラス世界共通の楽しみ方を実践しました。（5歳児：自然、4歳児：転がす、3歳児：友達との遊び、2歳児：色、1歳児：水、0歳児：音）

【10月～2月】

異年齢で遊びを共有し、一緒に活動をしながらか楽しみました。

子どもたちは、異文化コミュニケーションとして言葉・料理・乗り物・衣服などのそれぞれの国の「違い」に気付いていきました。

【3月】

年齢ごとの子ども達の発見を共有しながら、異年齢交流を通して遊びを楽しみました。

3 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

※活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具

「英語」のコミュニケーションレッスン、「リトミック」の講師委託、オンライン通信機材（PC、スピーカー）、Tシャツ染め材料（自然活動）、ボール、鉄棒、スロープ玩具（転がす活動）、図鑑や絵本、ままごと、電車玩具（異文化を中心とした友達との）遊びの活動）、カラーモフンボール、制作教材：スタンプ台、サインペン、粘土等（色の活動）、タライ、水鉄砲、マット（水の活動）、ハンドベル、布（音の活動）

4 探究活動の実践

<活動の内容>

【1期】

最初のきっかけとして幼児クラスの日々の「オンライン英語」を通して外国人講師の住んでいる外国に興味を持ち始めました。様々な国があることや、環境や文化が違うということに子どもが気づき、紹介された国の国旗を図鑑で調べるなど、興味が膨らんでいきました。3～5歳クラスでそれぞれが「世界の遊びと自分たちの遊び」という共通する楽しみを見つけた事となり、乳児クラスと情報を共有し、世界での共通する遊びと、クラスでの興味関心が高い遊びを実践していきました。

【2期】

5歳児は、様々な国の環境から「自然」に着目して、玉ねぎの皮を集めてTシャツ作りを実践しました。4歳児は世界の遊びから「転がる、転がす」ことを楽しいと感じるようになっていきました。自身で回る、転がすから「鉄棒、フープ、ボール」など様々な素材を用いて活動を楽しみました。

3歳児は英語講師との関わりから「世界には友達がたくさんいる」ということを知り、ままごとや電車での遊びを通して仲間との関わり大切さを実感していきました。2歳児はカラーモフンボールを使って遊んだり、制作を行ったりして様々な「色」があることを知りました。1歳児は、「水」の感触遊びを通して季節や気候にあった遊びを行い、0歳児はリトミック講師とのやりとりを通して、様々な心地の良い「音」を感じていきました。

【3期・4期】

2期での各クラスの遊びを広げ、異年齢で一緒に体験することを楽しみました。世界には様々な文化があり、「一緒に楽しめる事」がある中で、「言葉の違い」「食べるものや着るものも違う」などの環境などの「違い」ということにも、異年齢の活動をすることで気付いていきました。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>



5 振り返り

「ことば・異文化」というテーマから、保育者として子ども達の活動に共に関わり、気持ちを汲み取りながら進めていくうちに楽しみに変わっていきました。大きなテーマということもありましたが、身近な喜びや驚きをまずはクラスの少人数で共有すること、さらに他クラスや異年齢へと広げていくことで、「共通すること」と「違い」と感じながら相手を知る事に繋がると実感しました。子ども達にとって、自分たちの文化の素晴らしさを実感しながら、世界の様々な文化があるという事が認識できるきっかけとなったと感じました。